

# 2017.2.16 トークライブ 『対話と思考の場「地域づくり×生き方」の意味を問う』 レポート

宇都宮大学地域連携教育研究センター  
准教授 大森 豊

## 1、企画の趣旨

「地方創生」という言葉が日本中を飛び回り、「急いで何かしなくちゃ！」という不安な思いに駆られて多くの人がワチャワチャ動いているように感じます。急流に飲みこまれて、まだ見えてはいないけど、この先に大きな滝があるのではなかろうか・・・そんな感じ。

こんな時にこそ立ち止まる勇気を持ち、今本当に必要なことって何だろう、とみんなできじっくり考える時間・空間を創ってみたいなあと思ったのです。

というわけで、自らも課題先進地域と言われがちな中山間地域に移り住み、その地域がより良いコンディションになっていくための良き伴走者のような役割を担っている二人のメインゲスト、福岡県福津市津屋崎にお住いの津屋崎ブランチ LLP 代表山口覚さんと、徳島県神山町にお住いのリビングワールド代表西村佳哲さんにお越しいただき、『「地域づくり×生き方」の意味を問う』をテーマとしたトークライブを行うこととしました。

お二人に内諾をいただいて、次に考えないといけないのは、どのタイミングで開催すべきかということでした。後期試験の終了後、あまり時間が経たない日中の開催が適当か、という仮説を立て、この界限に出入りの学生さん（O 野くん）に聴いてみたところ、問題はなさそうでしたので、お二人と日程調整を行い、開催日を決定しました。

当日は、学生 19 名（宇都宮大学生 18 名、北九州大学生 1 名）、社会人 16 名の参加があり、宇都宮大学生については、すべての学部（5 学部）、すべての学年からの参加となりました・・・嬉しい・・・。

参加した学生の多く（全員？）は、それぞれに自らが主体的に社会課題に向き合う活動をしていたり、このトークライブに先立って行われた、学生主体のイベント「面白い宇大生を知る。（2016/10/19）」や「やりたいことをカタチに（2017/1/18）」に参加し、地域活動に対する感度を高め合っており、“猛者”揃いのメンバーとなりました。

猛者をさらに高みに引き上げるお手伝いをすべきなのか、そこまで感度が高まっていない学生に刺激を送るべきなのか、今後展開していく中では、今のうちに考えておかないと

いけないと思われます。

社会人も負けじとさまざまな活動を展開している“猛者”揃いのメンバーとなりました。

このメンバーが会場を満たしてくれたことは、メインゲストの選び方、事務局のこれまでの人間関係の構築、周知方法などがうまく働いたのかなと、手前味噌な分析をしています。

いよいよトークライブ開始です。

## 2、はじめに

まずは、全員でのチェックインを行うため、椅子だけで二、三重のサークルを作り、山口さんから本日のおおまかな流れ（半分はみんなで話をする時間、半分はメインゲストの話を聴く時間。同じインプットをしても経験や個性の違いから感じ方、気付きもそれぞれに違う。それらを共有することがとても大切。話し手にとっても、聴き手の受け止め方を知ることは、きちんと伝えることができたか確認するためにも重要。）が伝えられました。



さっそく三人一組となりながら、「今日はどういう思いで来ているか、何を受け取りたいか」ということについてお互いに話し合いました。グループ編成も話の切り出し方も実にスムーズ。



終了後、どんな話し合いがあったか二、三人発表してほしいという山口さんからのリク

エストに、いち早く手を挙げたのは、宇都宮大学農学部二年の小泉君。

彼は大学に入学してから様々な地域活動をしてきましたが、今一つ本気になれなかったことから、昨年の夏から今までいろいろなことを勉強したとのこと。そうした中から改めて地域コミュニティが自分たちが生きていく根底にあるのだと強く感じたのだそうです。当日彼は、地域と自分が歩いていくことが少しでも繋がったらいいなと思い参加したとのことでした。

いきなりすごい。「今時の若者は」と口にしつつ自分自身は凝り固まった常識の中でしか生きられない情けない大人たちに彼の爪の垢を大量注入したくなる発言でした。

小泉君に刺激され、次に手を挙げたのは同級生の加藤君。しゃべるのは苦手と前置きをしつつ、つぶやいた内容がすごかった。



彼は、大学に通いながら真岡市と茨城県の筑西市で地域おこし協力隊をしているそうで、元々地域おこしに6次産業化や地域活性化といったキラキラした印象を抱いていたが、それは本質ではなく、また、地域おこし協力隊向けの研修を先日受けた際に学んだ足し算とか掛け算に例えた理論でもなく、心と心の繋がりとかに本質はあるのではないかと感じているとのことでした。

今回のテーマが地域と生き方ということで、そういったことをいろいろな人と話し合うことができるのではというふわっとした思いで参加したが、ふわっとはしているが、重たいもの、大切なものであるということを感じたいと思っているとのことでした。

こういう感覚を持たない人にこういう感覚をつかんでいただくにはどうしたら良いのだろうといつも悩みつつ、今回のメインゲストのお二人のような、本質をきちんと捉える感覚、その感覚に基づいた周りに伝わりやすい言語化・実践のできる人と場を共有すれば良いのではないかと今回のイベントを企画しましたが、彼にはもう意識付けなど必要ではありませんでした。でも大丈夫。そんな人でもきっと楽しめるプログラムだから。

3人目は社会人の御厨さん。

若い頃栃木に自信が無く、早く東京に行きたいと思っていたとのこと。その後、いやいや帰ってきたが、意外と住みやすく、次第にいろいろな人が交流し、活気づいてきている、そんな気がしているとのこと。

御厨さん自身小学生と一緒に小さな塾をやっているそうで、勉強だけではなく繋がる何が欲しいと思って参加したとのことでした。

この地に漂う地元を誇れない空気感を感じ取り、しかしそれが変わりつつあることにも気づいて、自らも子どもたちに何かを伝えようとしていらっしやるようでした。

ここで、改めて山口さんから、この後場面転換をし、西村さんと山口さんが15分程度ずつ話した後、またグループでどう感じたかを話し合っただき、前半が終了すると告げられました。

また、「話し合いの心得」について、丁寧なお話もありました。ホワイトボードに書かれた文字は以下のとおりです。

**【参加の心得】**

- 否定しないで耳を澄ます
- 自分だけが正しいと思わない
- 沈黙を歓迎する
- 落書き、メモする

断定しない  
新しい気づきを大切に！

最初のフォーメーションを解き、ここからは、事前に学生と社会人、ジェンダーなどのバランスを考慮し、事前に振り分けたグループに分かれ、雲形のテーブルをそれぞれ囲むように座り直しました。

### 3、西村さんのお話

#### 【西村さんの言葉から】

私は、武蔵野美術大学を出て、二十代は会社勤め、三十代は個人事業主としてデザインの仕事をやる傍ら、三十代後半に「自分の仕事をつくる」という本を書くなど働き方の研究をしていました。

二十代の頃は 대기업での働き方しか知らなかったのですが、個人事業主になった際に個人での働き方を学ばなければならず、デザイナーを中心に尊敬する人のところを回って歩きました。

その際、「他人と違う結果を出す人は、やり方から違っている」という仮説を立てていましたが、実際こうも違うのかというぐらいやり方が違って、成果が生まれてこざるを得ないようなやり方をしているということがわかりました。

例えば、グループワークから結果を生み出すとしたら、まずそのグループをどのようにつくるかということをお先にやるのだということが良くわかり、三十代、四十代にそうして学んだことを応用して仕事をしてきました。

その仕事の中には、「頼まれたものをつくる」という「請負」の仕事と、「頼まれもしないものをつくる」という「メーカーポジション」の仕事を両方やりながら四十代前半をピークに暮らしていました。

二十代の頃から自分は何をして生きていったらいいのかということをもとに悩んでいて、その思いは三十代から四十代に入ってもあったのですが、その考えが次第に終わり、「自分はなに何をする？」ということから「いま周りにいる人や出会った人たちとなにができるか？」ということに関心が移っていきました。別な言い方をすると、自分のデザインスキルを「夢をかたちにする」のに使うのではなく「出会いをかたちにする」ことに使っていきたいという明確な思いが生まれたのです。

私は東京生まれ東京育ちですが、現在二拠点居住をしていて、その6割は山手線の内側の3倍ほどの面積に5,300人しか人が住んでいない中山間地の徳島県神山町で暮らしています。当初はそこで東京と同じ仕事をしていたのですが、そのうちに役場から少しずつ仕事の依頼があり、ホームページの作り直しなどを請け負ったりしている中で信頼を得たのか、2015年に日本中で地方創生プログラムを策定することになった際に、入札に参加してほしいとの依頼がありました。

当初、自分はデザインの仕事をしてきた人間で、政治とか人口問題とかはまったくわからない、まちづくりにも関心があるような無いような、「まちづくり」という言葉自体全然ピンとこない、まちってつくるものなのか、地域活性化とか全然わからないということで、一週間ぐらい悩みました。

しかし、もし神山町が外部コンサルに依頼し、粛々と策定したと聞いたら、自分は文句を言いそうだと思います、そこで、入札では、よくありがちな、口の字型にテーブルを囲み、お手元の資料をごらんくださいと言って、お歴々が並んではいるが発話回数が少なく、貴重な意見ありがとうございます、後は事務局が準備しておきます、という話し合いの仕方をしても埒が明かないので、改善案の提示があったら、それを四十代以下の役場職員と住民が混在した三人一組ぐらいで、次々と入れ替えて話し合いをすることを提案しました。

これをやったことにより、それぞれがお互いの様子を感じ取ることができるので、何かあった時に、あの人は興味がありそうとかあの人にお問い合わせいいのではないかとといった思い浮かぶ人が増えてきて、新しい組合せが起りやすくなるのです。



「アイデアとは、既にあるものの新しい組合せである」というのは、ジェームス・ヤングという人が「アイデアのつくり方」という本で言っていますが、まったく新しいアイデアというのは逆に無いとも言っています。もしそのようなものがあっても、誰も認識できないのです。そのため、まちで言えば、その新しい組合せをいかに多くつくっていくかということが大切だと思います。

アイデアを出すためのワークショップというのは好きではなく、アイデアを出しただけで実現できないと、自分はやれなかったという思いだけが残ります。頭の中で考えたことと衝動的に動くもの、思わずやってしまうものとはエネルギーが違います。

そのため、この場では、アイデアをたくさん出すのではなく、私がやるという人を見つけなければいけない、そういう中から役場をやめてでもやるという人や民間で自腹を切ってもやるという人が生まれてきて、「神山つなぐ公社」というものが生まれたのです。

この一般社団法人がスーパー繋ぎ役となり、地域のいろいろな課題や、お金を持っている人、力を発揮したい人、そういうものを結び付けながらいろいろなプロジェクトを起こしています。

#### 4、山口さんのお話

##### 【山口さんの言葉から】

津屋崎というまちでやっていることを集約するとこういうことになります。

**暮らしをつくる。風景をつくる。**

**本当の暮らし・働き方・つながり**

ここでは、行政が街並み保存に力を入れている訳ではないので、成り行きでどんどん新しくなったり壊れたりしているのですが、だからといって街並み保存とかをすることではなく、目に見える風景というのは、人の営みというものが滲み出てそれが生まれてくるものだという認識があり、津屋崎での暮らしというものがより良いものになっていくと、そこにある風景というものはより良いものになってくるんじゃないか、そういう気持ちでやっています。

では、より良い暮らしとは何かということを経済暮らしをする中で考えたのですが、そ



これは例えば物事の優先順位というものが仕事ではなく、家族、あるいは地域、仕事は三番目ぐらいでいいとか。あるいは働き方について言えば、一つの仕事で生きていくということは非常に特殊なことであって、産業革命によって労働集約型の仕事、勤め人というものが生まれ、たった一つの仕事で働くということが今では当たり前のような気がしてしまっている、就職活動やどこの企業で働こうと考えてしまう、それがとても不思議だと思っていて、そういうことも考え直してみようと思っています。

そして、人とのつながりというものは大きな価値だと思っていますし、特に自分が大企業にいたので、名刺交換をする時にその人は見ず、どこの会社の人でどういう立場の人かということを見つめて、この人は仕事につかえる人なのかという見方をしているのですね。

そういったことに違和感を感じて、ここ（津屋崎）では、仕事のつながりではなく、まずは人間として、友達として先につながりができて、もしかしてゆくゆくは仕事になるかもしれないけれど、そんなことは置いておいて、そういうかつては当たり前にあったものがとても大事なので、この場につくっていかようと思っています。

なぜ、こんなことをやっているのかというと、1995年にゼネコンに入り、バブル経済に少し遅れる形で公共バブルと呼ばれるものが生まれ、公共工事が当時たくさんありました。そんな中で長野オリンピックがあり、大きな施設・プロジェクトをやっていました。

何も考えずにやっていたら、自分はオリンピックの施設整備に携われてすごいと胸を張って言えたのですが、事業収支をたたくとどう考えてもお荷物施設になることがわかっているのですが、会社のためにやってしまう、それって何なのだろうと思ってしまったのですね。本当の会社というのは社会のためにあるのだから、これは建て替えた方がいいだろうとか建て替えなくてもいいと考えるのが常識的なのに、建て替えなくてもいいものを建て替えるように一所懸命営業して建て替えるように言わなければいけないということに心の苦しみを感じていました。

また、国土交通省管轄の財団に出向して奄美大島に通ったことが大きく影響しています。

海が大変綺麗で、スキューバダイビングのメッカであったり、マングローブの森があり、そこをカヌーで行ったりすると、すばらしい景色が見られます。しかし、自分は建設関係の仕事で住宅について調査に行っていたのです。奄美大島に限らずいろんな過疎地域、九州には炭鉱跡が当時は栄えていましたが、その後寂れていき、そういうところに今後どのようにして住宅を供給していくかという調査をしていました。しかし人口はどんどん減っ

ていきどこにも住宅を供給するという需要は無いのです。現在では人口が減少することを前提としていますが、15年ほど前は、減ることがわかっていたけれど、認めていなかったのです。わが町は頑張っけて人口を右肩上がりをしていくという計画であったため、住宅をこのように計画をしていくという報告書を書かざるを得なかったのです。私はどう考えても住宅なんて必要ないし、おばあちゃん達も私達が死んだら終わりと言っている、何をやっているんだろうと思いました。

どうしてそんなことが起きているのかと言うと、奄美大島の大人達が、「お前たちはこんなまちに住むな。もういいから早くいい大学に行って都会のいい会社で働け」と言っているのです。その言葉を受けて素直に島から出ていっている状況がありました。

あるいは商店街がシャッター通りになっているとか農業の後継者がいないとか言っていますが、ある意味それは成功だと思っています。何故ならその商売を営んでいる方が子どもに「お前、この商売をやっても儲からないから、お前はいい会社に入って給料をたくさんもらえ。」と言うので、子どもたちはみんな会社勤めをし、結果的に誰も後を継がない。農業も同じ。ということは、みんな脱出して成功と言える。

片方で出て行けと言いながら、わが町の商店街が無くなるのは問題だと言っているのは、まったく矛盾したことを同時に言うのは不思議でなりません。

奄美大島という場所は楽園のような場所だと思いました。こんな楽園のような場所で生きていたら人生幸せなのだろうって思いながらみんな都会に出て行ってしまふ。実際都会に出て行って思ったとおりに全員がハッピーだと思っていればいいのだけれど、半分は贅沢な暮らしをして幸せだと思っているかもしれないが、残り半分は、こんな生活で良かったんだっけと思っていたりする。では、その半分の人に戻ろうとしても仕事は無いしという話になっている。そういう話を奄美大島で見てしまったので、そこを目をつぶってゼネコンで生きていくというわけにはいなくなりました。



自分自身が福岡出身なので福岡に戻って津屋崎という小さなまちに移り住んで、ソフト事業をいろいろとやっていく中で、新しい生き方と言うものを見せていこうという風に思いました。

福岡市と北九州市という大都市の間に位置し、津屋崎町と福岡町の二町が合併した福津市のうち津屋崎をエリアに活動をしています。旧福岡というのは駅前で大規模な商業施設



ができ、マンションも建って、いわゆるベッドタウンとして栄えています。合併して一つの市になると、津屋崎はド田舎なので忘れられてしまう。なので、忘れられてしまわないよう、津屋崎というまちはここにあるんだよということを発信したくて津屋崎という言葉を使っています。

津屋崎の中でも「津屋崎千軒」というところがあり、ここでさまざまなチャレンジをしています。ここに移り住んで7年になりますが、暮らし・働き方・つながりというものを実現していこうということで、いろいろなシーンがまちの中に生まれました。どんなシーンが生まれたかということをご覧ください。スライドが15枚ぐらい2秒ずつ写ります。

7年の間にまるでなかった話が生まれました。7年前にこのまちの人達は、まちはどうなっちゃうんだろうともものすごく不安がっていました。元々塩田で栄えていたのだけれど、それも無くなり、海水浴も全然ダメになり、海の家や民宿もどんどん潰れていき、国民宿舎も撤退し、恋の浦というレジャー施設も撤退し、9年ほど前に西鉄電車も廃止になり、これからもどんどんいろいろなものが無くなる予定で、消防大学校がなくなり、水産高校もどこかに行ってしまうという話になっている。もううちのまちダメだという風になっていました。しかし、僕から見たら宝物満載なので、このまちで一緒に住みたい、哲学を学びたいということで入ってきて、僕がまちづくりをやるといよりも、そもそもあったものを一所懸命教わって、それを僕自身が何とか体现できるようになり、子どもや孫にそれを伝えていって、100年後にもこの津屋崎千軒が持っている空気感をそのまま伝えるということができればいいなと思っているんですね。

この場所での「まちづくり」とは、かつてあった人の営みの哲学を新しいかたちで取り戻すことなんじゃないかな、そんな風に思っているわけです。

まちづくりというと漠然として大きくて、何をすればいいかわからないので、僕は何をしようかと思った時に、情景（シーン）をたくさんつくるという意思を持ったんですね。要は、おじいちゃんおばあちゃんが外に出てきて若い人と立ち話をしている、こういうシーンがあるとか。あるいは廃屋だった場所がちょっとしたおしゃれなカフェになってそこでわいわい人が話している。私達がいい映画を見た時に画を思い出すときにストーリー全部を思い出すわけではなく、自分の中に思い描いた数秒間のシーンが脳裏に残るのだと思うのですが、そういうシーンをできるだけたくさん現実にこのまちに生み出していくということができたならどんなに素敵だろうと思うし、そんなシーンはなかなか人為的に生み出すことはできないのだけれど、そういうシーンが生まれやすくなる暮らしぶりや働きぶりや人間関係をつくっていけば、そのシーンがまちの中に垣間見えてくるだろうというような思いでやってきました。

お二人の話を聴いて、それぞれが感じたことをグループで共有する時間を持ちました。

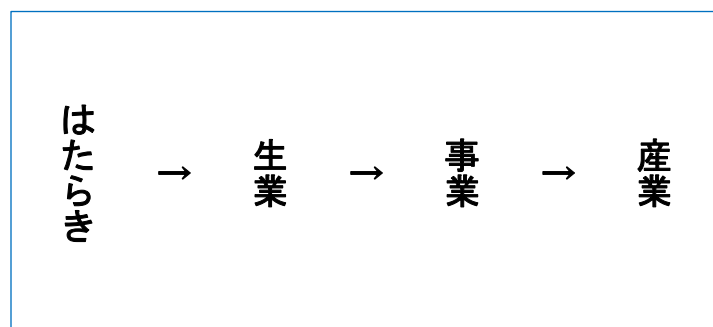


## 5、対話

ここからは二人の対話です。

まず、西村さんから学生主体のイベントということで、「仕事」についてのお話がありました。

スクリーンに映し出されたのは4つの仕事の段階でした。



西村／ 仕事には、「仕事だからやった」「あれは仕事なのです」というように自分と線を引くように仕事という言葉を使うケースと、「これが私の仕事なのです」と表現される仕事とは、本人との距離感も違う。後者が多い方が世の中楽しくなりそう

だと私は思うのですが、ちょっと別な角度で仕事をどのように捉えているか話してみたいと思います。

三陸沿岸で震災が起き、沿岸漁業が大破した際に、気仙沼に新しく施設をつくり大きな漁業の拠点を整備し、地域の仕事づくりをしようという話があったとします。

その時にも「仕事」という言葉を使いますが、この時の仕事は「産業」を指しています。国など行政は「仕事」というと産業の話をしします。

しかし、気仙沼に漁業と言ったらこの大きな漁業拠点しかないかといったらそんなことはなく、一艘釣り船で釣りをして、地元の寿司屋に卸しているような一人でやっている漁師もいるわけなのです。その人がやっている漁業とは、先程の漁業とは違い、その人の日々の暮らし、営みがそのまま仕事になっています。これは「産業」というより「生業」に近い。

ひとつ「仕事」という言葉を使っても、いろいろな状態のものがあるので、それを区別なく「地域の仕事づくり」と言ってしまうが、そこは整理をしながら捉えていかなければいけない。

では、そもそも「仕事」とはどのように成長、発展していくのかというと、一番最初にあるのは「はたらき」だと思っています。「はたらき」とはその人があらかじめ持っているものです。「あの子がいると雰囲気良くなる」とか、「あの人が入ってくると、まとまる話もまとまらない」ということがあります。これはその人が持っている気質であったり、あるはたらきがあり、それはそこにいるだけで作用するものです。「する」というより「ある」、存在にすごく近い。そのため、それは「仕事」という感じではない。機能はするのだけれど、まだお金になる前のもの。

まずそういう「はたらき」があって、「仕事」とは言わないが確実に機能するはたらきを銘々が持っている。その自分の中の気質を自分で発見したり他人に見出してもらい、こういうことをやっていったらいいんじゃないかということが、ある機能と重なり合っていくと、個人の「生業」になっていく。ものを書くとか人にインタビューすることであったり、みんなをまとめていくということが、その人の気質と合っていると、ものすごく展開していくのです。

自分がやろうと思わなくてもできてしまう、機能してしまう部分があるので、そうするとまた仕事があるから、対価が発生し、それがぐるぐる回って「生業」になっていきます。

この「生業」が「事業」になっていくのですが、「生業」の中には「事業」になっていくものとなっていないものがあり、この「生業」と「事業」の間には深い溝のようなものがあり、「生業」はその人がいなくなったらなくなります。とても個人に依存しています。しかし、「事業」というものは個人に依存していません。ある仕組みができていて創業者やスタッフが入れ替わっても回っていくのが「事業」です。この「事業」が地域で集積していくと「産業」になります。このように私は理解しています。

「仕事」と言った時にどこを指しているのかを明確にした方が話がしやすいです。

例えば、「おとなになったら、会社に入って嫌な仕事でも我慢してやらないといけないのですよね。」と言う学生に出会うことがたまにあるのですが、そういう人が抱えている「仕事」とは、「事業」または「産業」にある「仕事」のことを言っています。会社に帰属していて、個人がどう思おうと役割が決まっているからやらなければいけない、そういう中で働いている人をたくさん見てきている、しかもつらそうな人を見ていると、自分の仕事観がそうになってしまう。

「事業」の良いところは、システムが安定していて、それを創った人が「仕事の奴隷」にならなくてすみます。「生業」のままだと、本人が本人を酷使し、本人の奴隷みたいになってしまうところがあります。これが「仕事」になってシステム化されていけば、人に「仕事」を任せることができるので、創業者がそのことに隷属しないで、次のことを考えたり準備したりすることができます。

そうした自由度があるので、「生業」から「事業」に渡るとは結構大事なのですが、ロジックが違うのでなかなか渡れない。自分無しでも回る世界をどのようにつくるのかということです。

この「生業」と「事業」の間に「家業」というものがあり、海と川の中の汽水辺りの感じでロジックが不思議なのです。事業なのだけれど、お父さんはこう言っているしとか、いかんともしがたい属人的なものがあったり、雇っている人たちもなかば家族みたいであったり。最近おもしろいと思うのは、事業なのだけれど家業っぽい、だけど血縁関係のある家族ではない、人間性が重視されていて、それぞれがどんな気持ちで働いているかにウェイトを置きながら、でもちゃんとビジネスをしていこうとしている「ニュー家業」のような小さな若い会社が増えてきているというのがあって、それがわたしにとっては光明です。すごくいいなと思っています。

以上私が「仕事」についてどう捉えているかお話をさせていただきましたが、

どう思われますか。

山口／ むちゃくちゃ腑に落ちます。今回は地域づくりということの一つのテーマとしていますが、50万都市の宇都宮と5,300人ぐらいの神山町では規模感が全然違いますが、神山町ぐらいで仕事をつくっていくといった時の「仕事」はどの辺りのことをやると良いのでしょうか。

西村／ 神山町ぐらいの中山間地では、役場が一番大きな雇用の場です。公務員が大きな働き口になっています。地方に行くほど、公務員か農業で働いているか工場で働いているかということになっている。そういう中では、事業が役場を越えられないことが多い。

そうすると、移住して行って新しい生活をつくりたいという人たちは、まず自分の仕事をつくろうとするので、「生業」でいくことになる。その範囲に留まって成長しないでいると、自分の仕事の奴隷になっていってしまうおそれがあり、結構つらいですよ。年を取って続けていくことは結構つらいです。

そのため、どこかで家業的なもの、仕事のクラスターが地域でも増えるといいと思います。

これは宇都宮みたいなところでも同じだと思います。

日本はいったん「産業」がダメになっているからです。これまでつくってきた車や白物家電が売れなくなってきてたちいかなかったのが1990年代後半ぐらいですよ。みんな買い替え需要とか言って多機能化とかエコ家電とかやっているわけですよ。これでもものは売れなくなっているけどなんとかしてもうちょっと売ろうとした今は果てにいますので、そうすると次の「産業」をつくっていかないといけないのですが、これっていきなりはできないですよ。

「産業」になる時は、「生業」、「事業」という順番に成長して行って、伸びそうなものであるとか、その地域性に合っているものが地域の産業として確立されていくのですが、行政とかはいきなり「産業」を欲しがってしまいますよね。

それは無理なので、「生業」、「事業」から始めるしかないのではないのでしょうか。

ということは、どんな「事業」や「産業」が生まれるにしても、順番としては「生業」からスタートするんだという話であれば、まずはその地域に続くかどうかはわからないが、「生業」をやりやすい空気をつくって、そういう人たちを集めるということは理にかなっていて、かつ、その中で新しい組合せをつくるのが大事です。

そうしないと、田舎に行ってパン屋さん、以上、ってなってしまう。ずっとそれでいいであったらそれでもいいのだけれど、世の中がこれまでと違う世界に入っていくのだとしたら、パン屋なのだけれど、ただのパン屋と言う言葉では語れないというか、パンは売っているのだけれど、このパン屋を軸に子どもたちの活動が行われていて、保育園なのかパン屋なのかかわからないとか、一つの仕事を足掛かりにしながら、もう一つの足で重心を別のところにも移そうとしている人たちが最近増えてきている。

その時に一人でやってもいいのだけれど、そのパン屋さんと保育園の先生だとか子育ての終わったお母さんとか、役場の誰かとかが組み合わさると、パン屋を軸に、この場所に必要新しい仕事ができる。その時にはただのパン屋ではなくなっているはず。そういう仕事をつくっていくことが大事で、そのためには人と人との新しい組合せをつくるということがとても大事です。

山口／ それはまさに「神山つなぐ公社」の“つなぐ”というのがまさにそういうことをやっていたらいいということですか。

西村／ 自分がそういう文脈でやっているのだからそういう話ばかりですみません。

山口／ とんでもないです。なるほど。

仕事の話はなるほどと。もう一つ僕自身も問題意識を持って向かっているのですけれど、地域づくりとかまちづくりっていったい何なのだろう。この得体のしれない・・・

西村／ 使う？この言葉？

山口／ いや、僕はあまり使いたくないんだけど・・・

西村／ 何で使いたくないの？

山口／ いい指摘ですね。(会場：笑い)

西村／ 僕も使いたくないんだよ。

山口／ なんか結果である感じがまずするっていうのが一つで、

西村／ はいはい。

山口／ まちづくりではなくて、まちはつくられる気がするんです。

西村／ られるね。

山口／ それこそある人はパン屋をやっている。でも、パン屋がまちをつくろうと思っ

ているかは謎で、パンをつくろうとしているわけですね。

西村／ そうそうそうそう！

山口／ で、ある人は塾をやっている。でも、子どもを大人になってもやっていける人に育てようとしているのであって、まちをつくろうと思っているのではない。でもそれが百人ぐらいまちに集まると、こう引いてみると、ああ、いいまちだなあ、みんなでまちづくりやっていますねって言われて、でも一人一人に聴いてみると、いや、まちづくりやっているつもりはないと言い、じゃ、誰がこのまちをつくっているんだろう、みたいな感覚がすごくあるんですね。

西村／ わかるわかる。まったくそのとおりだと思う。

山口／ そういう風になった時に、じゃあまちづくりは仕事の集積なのかというと、そうでもない気がするのですよ。仕事以外の何かも含めてより良き町に見えていて、仕事以外の何かとは一体何なのだろうという説明があまりついていない気がするのですが。

西村／ そうか。一個一個の仕事とは別な何かがありそうだと。

山口／ はい。おそらくさっき言っていたパン屋をやっているんだけど、パン屋をやっていないというホニャララをやっているんだというものの集合体がまちをつくっているのかもしれないような気がしますけどね。

西村／ そうね。例えば、商店街があって、今シャッター商店街とか全国にあるじゃない。ある日突然張り紙がされるわけですね。「長らく愛顧賜りましたが、本日をもちまして閉店させていただきます。」と。で、ああなっちゃうと手の出しようがない。で、その時のパン屋さんでスタンドアローンで繋がっていない感じがします。でもそのパン屋が保育であったりまちの中で繋がっていたら、そう簡単にやめられないと思うのですよ。

山口／ なるほど。

西村／ 業態の中に引っ込んじゃって、孤立しちゃっているから、放っておいてくれみたいなことができちゃう。そこにあるないで言うと、繋がりがじゃないですかね。

あともう一つ思うのは、まちづくりって言葉は使いたくない。デザインするってことは計画するってことだよな。設計してそれをつくることだから。

こういうものは事前にあらかじめつくれないものだから。

もうちょっと粘土造形というか、粘土って指でぎゅって押したらこんな形にな

ったから、じゃあこうかなみたいな、自分のやったことだとか粘土の反応だとか、そういうことを連続させながら造形していくわけじゃない。あらかじめ設計図は無い。

山口／ はいはい。

西村／ こっちの感覚の人にデザインという言葉はすごくヒットしない。粘土造形家に。

山口／ なるほど。

西村／ 具体的なまちの反応だとか具体的な一人一人の表情だとか、そういうところから次こういこうかなって探っている人たちは、まちづくりしているって感じが無いと思うんだよね。

山口／ わあ、なんかおもしろいですね。

西村／ そういう人たちが最近使うなあって私が思う言葉は、「発酵」。

山口／ 「発酵」ね！ああなるほど。

西村／ パン種があって、菌の状態が温度、湿度、さまざま良くなると勝手にプクプクプクプク始まると。で、その状態をつくっているみたいな感じで、「発酵」という言葉を使う人たちがちょっとずつ出てきているなあとと思って。「発酵」はピンと来るんですよ。

でも、「まち発酵」とか言っても全然わかんないですよ。

でも「発酵」はコンディションはつくっているんだよね。

山口／ わかるわかる。すごいわかる。

あの僕も実はピンとくる話がありまして、まちの中で自分は何者なのかと問うた時に、いろいろな人との話の中でフィットしている言葉があって、今の話を同じなんですけど、ミミズであると。

西村／ ミミズ（笑）？言うの？

山口／ つまり、土壌をつくっている。概念の中に、多くの人が心の中に自分の種、何かやれること、やりたいことがある。

でも都会の土はもう固くて芽吹くことができないので、どうせ私の種は芽吹かないのよと。

だからしょうがないから産業の中に入り、やるしかないのよと思っているけれ



ど、津屋崎の土壌は、ミミズがいて、僕だけじゃないです、ふかふかになっていて、どんな種が持ち込まれても芽吹くと。

で、水をやるというのも一所懸命頑張ろうと。

で、「じゃ、どんな花が咲くんですか」って行政とかには、その結果何が起きるんですかって聞かれるわけですよ。

どんな花が咲くか僕にもわからないんですよ。

でも、百人が百個の種を持ち込んで、草花が咲いているという状況が、すごくいい状況だなあ、で、これが津屋崎らしさかもしれないって感じています。

よくまちのビジョンって、まちは一言で表さないとダメなんだよっておじさんが昔よく言ったりするんですよ。あるいは目玉がいるんだとか。

なんかそれって、わがまちにこういう大木を育てますって、はいみんなこれ手伝ってっていう感覚がすごくあって、そうじゃないんだろうなあという思いがあって、さっき発酵させる環境をつくるというのが、言葉は違えども、すごくフィットしました。



西村／ ミミズは最終的にどんな花畑か草花か森かわからないけど、何になるかはわからないと。

山口／ 今のところわかっていません。

西村／ 山口さんは、まちミミズ？

山口／ まちミミズ。カッコいい言葉ではないですね。

でもね。僕らが社会人になって二十年三十年やっていく中で、そういうことがだんだんイメージされてきている。

今ここには若い方がいらっしゃってですよ、まちづくりをやりたい、地域づくりをやりたいって、これってどうなのと我々が言っていることをやりたい人がいっぱいいるわけですが、じゃあ、私達は何をすればいいんでしょうって、かえって迷ったりして・・・

西村／ ミミズになればいいのですよ。

一回味噌でも仕込んでみるといいんじゃないですかね。デザイン、ものづくりのいいところは、自分の手の内に具体的につくっていけるところですよ。でもつまらないところは、自分以上のものはできないことですよ。

山口／ なるほど。

西村／ そこが、グループだとか自分じゃない人間同士の関わり合いの中でやっていると、本人が思いもよらなかったところまでいけたりするんだよね。そういう中に自分を投げ込んでみるといいのじゃないかな。

味噌って自分がつくる感じ全然ないからね。

山口／ 勝手に何か・・・

西村／ そうそう何か月後かにひっくり返してみるとあちゃーとかね。でも十か月後にはお味噌汁が食べられるみたいな。自分があるセッティングをつくるんだけど、自分の想像を越えたものが展開するっていうのを・・・でも、小さい頃の遊びとか全部そうだよ。

山口／ 確かに。あまりデザインした記憶が無いですね。

西村／ 今日なんとか遊びしようと言いながら、遊びもどんどん変わっていくし、いるメンツによってできることが変わって行って、こういうことがしたい、こういう人がいるべきだってぜったいみんな言わないし。だからああいう時間の良さってみんな知っているはずなんだよね。それと同じ感じで、ちゃんと稼いで、続けられることをやっていけばいいのではないですかね。

山口／ なるほど・・・。とにかくなんかやれと。まずは、はたらきかけること・・・

西村／ 自分の「はたらき」に関して言うと、この「はたらき」を自分で発見するのはちょっと難しかったりするんだよね。

他人の方がこれを結構発見してくれるのですよ。

で、本人はそのはたらきを自己評価していなかったりするのですよ。

例えば、空とか雲を三時間でも六時間でもずっと眺めていられます、そういう人がいたら、それは明らかに能力だと思います。普通できないから。

でも、私放っておくと空とか雲を三時間でも六時間でも見ちゃうのですよねってみんな自分をディスる。ダメなの私って。

自分が飽きもせず、ずーっとできることをあまり評価していないのですよ。

それに対してポジティブな視点を他人の方が投げかけてくれる。自分もちょっと視点を変えると、自分が飽きもせずできることって何かあって・・・本人にとっては自然にできるから評価が低いのよ。

山口／ できて当たり前のような・・・

西村／ そうそう。他人の前で上手に話せるという人がトレーニングをしたわけでもなく話せるとしたら、ま、でも普通だし・・・って感じで、評価しない。

他人の方がわかる。見つけてくれる。

「はたらき」のところも他者が必要で、他人に見つけてもらったことだとか関わりの中で生業にしていくのだけど、自分の仕事を自分だけで考えないということですかね。それがいいのではないかなって最近すごく思う。

僕らって何をやってもいいし、唯一無二のユニークな存在として生きていきたいと思いますみたいな、世界にただ一つだけの花みたいなね。

そう呼ばれちゃうと、本当にしんどいなあ、やたら選択肢が多すぎて。

で、何をやって生きていくんだお前はって私は何ができるんだろう、何をすべきなのだろうって強迫観念が特に若い時期に出やすいと思うんだけど、でももうちょっと人との付き合いだとか人との関わり合いの中で、じゃあ、僕と山口さんだったらこういうことができるねだとか山口さんからエールをくれたりだとか、自分の仕事を自分だけで考えずにやっていくというのがそれでいいんだって思うことがすごく大事だと最近思っています。

自分のキャリアだとか自分の仕事をキャリア教育とか下手すると自分の個人意思をしっかり持たせようとするんだよ。

それって西洋型なの。西洋は自分の意思で生きていくんだっていう個人主義の世界で、日本はなんか、もっと違うと思うんだよね。

相手に応じて自分を変えていったりするし、この人との関わりの中で、じゃあこうだなみたいな感じだとか。

個っていうところにウェイトを置いた社会では本来ないのに、西洋型のコーチングだとか西洋型のキャリアデザイン、キャリアブランディングだとか、夢の持ち方だとか、マイプロジェクトやりましょうだとか、そういう個人っていうくびきから一回離れて仕事のことを考えてみると、すごく有機的なものになっていくのではないかなと最近思っています。

山口／なるほどね。

西村／山口さんも津屋崎っていうまちとの出会いが大きかったのではないの。

山口／大きかったと思います。

西村／何か自分がやりたいことがあって津屋崎を選んだわけではないんじゃないの。

山口／いや、本当にそうです。誰もやらないのだったら、自分がやらなきゃいけないなというのが自分の場合はあったというのと、僕、その当時は都会のマインドが頭にあって、福岡弁喋るのなんてダセーみたいなイメージがあったんですよ。

西村／福岡の人でしょ（笑）

山口／そうそうそう。旧型だったんですよ。どちらかというと。東京に行ったらできるだけ福岡弁を出さんようにせないかんみたいな。

ゼネコン辞めて戻ろうって行って福岡へ戻るときに津屋崎に今は入っていますが、実は最初は福岡市内に行って、三年ぐらい過ごしていたんですね。

津屋崎とは東京にいる時から仕事に関わりを持つようになって、じいちゃんやばあちゃんが、あんたみたいながいたらいいけん移り住んでこなってすごい言われたんです。

でもその時は誰がこんな田舎行くかって。誰がこんなじいさんとばあさんしかいないところで、誰が行くかと、自分たちができないことを若者に押し付けてやらせようとしているという感覚がすごいあったし、都会のきらびやかなものを手放したくない意識もすごくあったし、その時点では、いやあとか言いながら、

福岡市内に移り住んで通いながら仕事をしていたんですね。

だけど、なんかのタイミングで行かなきゃいけないという気持ちになって、行きたいという気持ちと行かなきゃいけないという気持ちがちや混ぜになっていたんですけど、それが心の中に何が起きたのかさっぱりわからないんです。

西村／ それって天職とか本人の仕事が一番発揮される三条件を満たしているよね。やりたいって輪っかとできるって輪っかとやるべきって輪っかが重なっているところの仕事はすごい安定性があるって、本人の力がいかんなく発揮される、それをばっちり満たしているよね。

山口／ それはうまくいったと思いますね。

西村／ それが自分の思惑からいっていないというところが面白いよね。

思惑からいっていると、本人は結構つまらないんじゃないかなと思う。ま、こんなもんだらうって。ま、自分が思った人生ってこうだったんじゃないかなってそれほど面白くもなさそうに語るんじゃないかな。

でも、自分も思いもよらなかったことに自分を投じてっていうか投げられてっていうか、引きずり込まれてっていうか、そうして自分が知らないところまで来ちゃったっていう仕事は、どんな人も嬉しそうに喋るよね。自分が思ってもいなかったところまで来ちゃったということが、本当に困った風ではないんだよね。

山口／ 困っていることを楽しんで喋っているとかね。

西村／ それは、自分の思惑とか設定を越えて展開できちゃったからで、その時にあったのは、自分以外の人との繋がりだとか、関係性だと思うんですよ。

山口／ ちょっと僕西村さんに無粋な質問していいですか。

おそらく西村さん自体も、できること、やりたいこと、求められていることの真ん中を、いろいろステージは変われども、ずっといってるんだと思うんですけど、大学生に成り代わって聴いてみると、それ理屈はわかるけど、五年後十年後不安にならないの、その仕事がやれなくなっちゃったらどうするのとか、老後どうするんですか、その恐怖とどう戦っているんですか。若しくはそんな恐怖なんてありっこないのか。未来に対する不安、収入に対する不安はありませんか。

西村／ 頭で考えると不安ですよ。

でもこれまでの現実が常に自分が考える以上のものになっているので。自分がこう考えて設計してきた人生でつくってきたら、考える範囲のことが起こるだけ

うから不安なんですけど、自分がもうちょっと開かれていたら、自分の思惑とか設計とか考えていること以上のことが必ず起こるので、それによって生かされるだろうっていう安心感があります。

そもそも考えてもわからないことは考えたところでどうにもならないんですよ。

だから、まあいいじゃないですか。

山口／ そういう楽観的な気持ちは必要ですかね。

西村／ 僕らのようななんとかしている人たちが学生さんたちの目に留まると。ああにはなりたくないなって思われているかもしれないけど（会場：笑い）

お二人の対談は以上です。要訳しようかと思ったのですが、一つ一つの言葉に意味があり、その言葉を後できちんと繋げているので、ほぼノーカット版で再現してしまいました。

この話を聴いて、また改めてグループでそれぞれがどう感じたか共有する時間を持ちました。

その後、また会場に感想聴きましたが、「発酵」という言葉が強く心に刺さったこと、まちは結果として創られること、にも関わらず、行政は「とりあえずイベントをやるよ」と言ってくるのが腹立たしかったことなどが挙げられました。

このイベントについて山口さんが拾い上げました。

### 【山口さんの言葉から】

僕もイベントのことをすごく考えたことがあって、地方を盛り上げるためにイベントだ！とか言いますけど。

鳥インフルエンザになってちょっと落ち込んだ町があったんですね。その時にお互いが本音が言えない関係があって、そこに僕がちょっと入ってほしいと頼まれて今日のような対話の場をつくった時があったんですね。

その時は二日間でやったのですが、初日は地元のなんとら青年部みたいな人たちがいっぱい集まって、体育会系的に、「俺たちは頑張るんだ！俺もやるぞ！エイエイオー！！」って言っていたんですよ。

これ、なんか違う・・・って思って、二日目の朝に、みんな本当のこと言いましょうみ

たいないろいろな話をしていたら、実はイベントだらけなんですね。

いろんなお金もあって土日のたびにイベントをやっている。

実は、家では奥さんや子どもに「また土日出て行くの？あなたは家庭とまちづくりと、どっちが大事なの！？」って、この世界ではよく聞く話なんですけど、そこですごく葛藤している。

でも、家庭のために今日まちづくりお休みさせてくださいって、みんなが頑張っているのに言えない、実は言えずに自分はすごく苦しんでいるんだって誰かが口火を切ったら、いや実は、実は、ってみんな言い始めて。

例えば、鳥インフルエンザだったので、農業の関係者には補償金が出ていたんですけどね。それで人が来なくなっていたので商店街に誰も来なくなっちゃって、飲食店や旅館業を営む人たちのところにもまったく人が来なくなっちゃったんですよ。

でもそういうところには補償金が無いわけですよ。で、実は自分のところは補償金もなくて苦しんでいるんだみたいな話をした時に、農業やっている人はそれを知らないんですよ。「え！お前のところ補償金来てないんか？」って。

それで話をしていくうちに俺たちはいったい何をやっているんだって話になってきて、イベントで盛り上げるってことじゃないよって、毎日平凡な今日が幸せであることを考えないと、それを見て見ぬふりをするためにイベントをやっているんじゃないかって、こんな話が出てきているんですね。

それをすごく僕は重たいと思って、まちをつくっていくってそういうことだなって。

津屋崎では、実は、平凡なことしかやっていないんですね。本当に当たり前のことを当たり前にやっているだけで、よく世の中って費用対効果とか原因と結果とか一対一でものごとを提示させようとするんですけど、実はそうになっていなくて、ただこのまちいいよねっていうのは、百個ぐらいの小さな原因がごちゃごちゃごちゃって集まっていいまちという結果が生まれているわけですよ。

で、一個一個拾い集めて、これは原因かな・・・違う。これは原因かな・・・違う。小さな小さな原因の寄せ集めというのが大事だと思うのですが、なかなか多くの人は信じきれない。

そんなことがあってですね、この小さな一つ一つを丁寧に積み上げるということが大事ななといつも考えていて、イベントはあまりやらないということをしていますね。

この話を受けて、西村さんが繋がります。

### 【西村さんの言葉から】

結果としてしか起こらないことを目的にしてしまうと何かが間違えるというのは本当にあるなと思います。幸せになるということもプロセスがあってそうなるのだけれど、みんな最初に結果を設定して結果を欲しがらるんですよね。これは大きな価値観の転換ですよ。

イベントというのは、非日常性ですよ。神山つなぐ公社というプロジェクトは、まちを将来世代につなぐという総称があって、まちがどうなっていくかはわからないし、どうなればいいのかわからないけど、将来世代につなぐということだけを基準にしているんですよ。別な言い方をすると、将来世代が無責任に諦めないということだけを定める、ということをしています。

“今日も順調に問題だらけ” 神山町の役場の課長クラスや若手とかが何人か集まってワーキングをやるんですよ。全然バラバラ、方向性が定まっていない。そういう時に「僕たち全然イケてないね。」と言いながら笑えると次がある感じ。イケてなさを隠しちゃうと次に行きようがないんだよね。このダメなところを味わえると、「でも、」とか「じゃあ、」って動きが出てくるから、ダメなところをちゃんと味わう時間って本当に大事だよ。

こうして、トークライブは終了しました。

## 6、ワークショップをふり返って

思いっきり手前味噌ですが、大成功だったと思います。手前味噌・・・お！これも味噌づくりのような企画でしたね。ゲストの選定や参加者への声掛けはしましたが、どんな結果を生むかは参加いただいた皆様次第だったと思います。

参加された皆さんに多くの気づきが得られたであろうこと、ゲスト同士がお互いに大きく共感し合っていたこと、何よりも主催した私達がこのイベントから多くの可能性を見出すことができました。

この後、山口さんには残っていただき、場所を変え、引き続き懇親を行いました。事前に参加意向を聴いてはいましたが、当日のドタ参もありと伝えたところ、予想以上の参加がありました。ほら、大成功。

深夜まで、山口さんの繰り出す言葉を逃すまいと前のめりで聴いている学生達の熱心な姿が強く臉に焼き付いています。あなたたちの思いに寄り添いながら、これからも一緒にやっていけるように、僕たちも頑張らないとね。